

## 『杖』 ～Soul to Soul (1)～

西脇市病院事業管理者 岩井正秀

西脇病院が建て変わる前の、まだ古い建物であった頃の話である。

その老夫婦は、いつも受診日を合わせて二人で外来にやって来た。おじいさんは背の高い偉丈夫で、いつも立派な茶色い木の杖をついていた。一方、おばあさんは小柄で、その頭はおじいさんの胸にようやく届く程だった。おじいさんの診察をしながら、「昔から、同年代と比べると背の高いほうだったでしょうね」と言うと、間を置かず、後ろから「そうなんですよ。それで女の子に良くもてましてなあ。わたしゃ、しょっちゅう泣かされたもんです」とおばあさんが答える。「しょうもないことを言うな」と振り返りもせず、おじいさんが低い声を飛ばすと、「はい、はい」と言ってから、「ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ」とおばあさんは笑った。

一月の寒い朝に、おじいさんは救急車で運ばれてきた。起きて来ないので見に行ったところ、布団の中で反応がなかったのだという。蘇生を行うも、おじいさんは戻ってこなかった。家族を集めて、病状を説明し、亡くなったことの確認を告げた。その間、おばあさんはおじいさんの横に立って、その顔をじっと見つめたままだった。止まってしまったおじいさんの心臓と同じように、おばあさんも動くことを一切やめてしまったかのようなようだった。

三週間後の予定していた受診日に、おばあさんは一人でやって来た。診察室に入ってくるその手には、見慣れた茶色い杖が握られている。おばあさんは椅子に腰かけると、「これ、あの人の杖を切ってもろうて、私が使っとるんですわ」と言いながら、随分と短くなった杖を持ち上げて見せた。「そりゃあ、きっと、おじいさんも喜んどってやわ」と私が言うと、「そうでっしゃろうか」とおばあさんは少し首をかしげたあとで、「ひゃっ、ひゃっ、ひゃっ」と小さく笑った。

2026.4.30